

# 『壁』関連テキストにおけるゴチック体

— 安部公房のタイポグラフィ —

鳥羽耕史

一 はじめに

拙稿「何が壁なのか」(注1)では、安部公房『壁』関連テキストを網羅してその異同を明らかにし、暫定的なステマを示した。また、ヴァリアントの発生原因として、①作家による改稿、②誤植、③誤記を正し、統一されていない表記を揃えようとする編集意識、④旧仮名から新仮名への変換や、拗音促音の区別をつける際に生じる解釈の問題、⑤一行あたりの字数が変わるときの改行解釈、⑥ルビの添加、の六つを想定し、それぞれの例示と簡単な考察を行なった。その際、②に近いが別の問題を含むゴチック体や太字、大文字の用法については扱いきれなかったので、この誌面を借りて考察を加えておきたい。

二 「事業」と「赤い藪」の場合

『壁』関連テキストの中でこの問題と関わるのは、「事業」「赤い藪」「S・カルマ氏の犯罪」「パベルの塔の狸」の四編であり、「魔法のチョーク」と「洪水」には用例が見つからない。以下、この関連する四編の初出と初版について、どこにゴチックや太字、大文字が使われていたかを整理しながら分析していく。

「事業」(最初の番号は「何が壁なのか」でのリスト番号、後は全集の頁段行)

2 510上1偶然こそわれらの神である―【太字】 511上5道徳をよそおうことが道徳―【太字】 512下17ユニットビヤ―【太字】

まず、世紀の会の共同制作として出版されたガリ版刷りの書物、『事業』について見てみよう。最初に太字とされている箇所の前後は、「聖プリニウスは言った。偶然こそわれらの神である。私もまたこの神を信ずるものである。」となっており、次の箇所は「道徳

をよそおうことが道徳——わが神の言葉である。」となつてゐる。どちらも重要な言葉の引用であり、また、最初の箇所は「偶然」という神の言葉と名づけた。」という部分なので、引用ではないが、この小説のテーマに関わる機械の名前なので、やはり重要な言葉を太字で表していることになる。初版(6)以降では、これらの太字部分に強調はなされていない。

### 「赤い繭」

3 492下13「他」彼！「ゴチック」 下22さまよえるユダヤ人！「ゴチック」

雑誌「人間」に発表された「赤い繭」の場合は、「では公園のベンチはどうだ。むろん結構。もしそれが本當におれの家であれば、棍棒をもつた彼が来て追いたてさえしなければ……」という箇所以降、警官らしき「彼」がすべてゴチックで表されている。この違いはややわかりにくいだが、その前に出てきて窓を閉めた「彼女」の明朝体とは明らかに違う。「彼」という代名詞を固有名詞的に用いることを明示するためのゴチックであると考えられる。「彼」の言葉を聞いた「おれ」は、「さまよえるユダヤ人とは、すると、おれのことであつたのか？」という感想を洩すが、そこにもゴチックが用いられている。これも「事業」と同じように、聖書に由来する重要な言葉である「さまよえるユダヤ人」を強調する役割を果たして

いるだろう。「事業」と同じく、初版(6)以降ではこれらの太字部分に強調はなされていないが、特に「彼」の用法は特異なものであり、「夢の逃亡」(注2)などにおける固有名詞の問題と共に考えられるべきものであろう。

### 三 「S・カルマ氏の犯罪」のグラフィカルな紙面と活字

4 (6との相違点) 378上1目「明朝大文字」↓「明朝」 392上6「ここにいた！」「ゴチック」↓「ここにいた！」「明朝」 下15「17旅への誘い！」世界の果に関する／講演と映画のタベ「ゴチック」↓旅への誘い！／世界の果「ここまでゴチック、以後明朝」 411下12旅への誘い！世界の果に関する講演と映画のタベ「ゴチック」↓「明朝」 下16「17死んだ有機物から生きてゐる無機物へ！」「ゴチック」↓「明朝」 428下18世界中、どこまでも……「ゴチック」↓「明朝」 429下9「11特殊喫茶・鳩／キヤバレー・ロンド。／ラ・クンバルシート。」「ゴチック」↓「明朝」 431下11世界の果「花文字の挿絵」↓「罫み罫線にゴチック」 440上16「下11裁判速報」明朝大文字」↓「明朝」

6 378上1目「明朝大文字」 380上14 S・カルマ「ゴチック」 381下13 S・カルマ「ゴチック」 392上6「ここにいた！」「ゴチック」 下15「17旅への誘い！」世界の果に関する／講演と映画のタベ「ゴチック」 411下12旅への誘い！世界の果に関する講演と映画のタベ「ゴチック」 下16「17死んだ有機物から／生きてゐる無機物へ！」「ゴチック」 426上13「14マネキン人

形製造専門／各種注文に応じます【ゴチック】<sup>428</sup> 下18 世界中、どこまでも

……【ゴチック】<sup>429</sup> 下9～11 特殊喫茶・鳩／キャパレー・ロンド。／ラ

・クンパルシート。【ゴチック】<sup>440</sup> 上16 裁判速報【明朝大文字】

「S・カルマ氏の犯罪」の初出（4）と初版（6）を見比べてみて気が付くのは、初版で多用されるゴチックの、初出における意外なほどの少なさである。「近代文学」の初出でゴチックが用いられているのは、事務所での名札を表す「S・カルマ」という文字以外すべて囲み野線の中であり、地の文の中にゴチックが現れることはない。名札、名刺、ビラ、看板、スクリーンの文字をそのまま引用する場面にだけゴチックが使われている。<sup>392</sup> 下15～17の広告ビラの引用では、見出しの「旅への誘い！」と「世界の果」までがゴチックで、後は明朝の形になっており、初版よりも「世界の果」という言葉を強調した形になっているのが特徴だが、全般にはゴチックの用例が少なく、おとなしい紙面であると言えるだろう。ところが月曜書房の初版になると、桂川寛による挿絵が加わった上にゴチックも多用され、紙面は華やかさを増してくる。初出を引き継いだ囲み野線の引用部分はもちろんのこと、本文中にも様々な形で大文字やゴチックが現れる。本文一行目の「目を覚ましました。」の「目」は、他の文字の二倍以上の大きさになっており、洋書のイニシャル組みを思わせる。動物園で「ぼく」を見つけた追手の発する「ここにいた！」という声がゴチックで組まれているのは、「大声」を視覚的に表したものであるうか。<sup>411</sup> 下12の「旅への誘い」云々の部分

は囲み野線ではなく、以前見たビラであることを語る地の文の一部なのだが、こゝもゴチックで組まれており、部分的ではあれ視覚的な再現効果を持っている。「世界中、どこまでも……」というのは407上12～21で哲学者や数学者が語ったことの要約であり、「ぼく」が世界の果に行くべきことを示唆するマネキン人形の言葉の一部であった。これは「事業」や「赤い蘭」と同じく、重要な言葉をゴチックで表す用法と言えるだろう。「特殊喫茶・鳩」云々は「じめじめする狭い道」に並ぶ看板の文字の引用であり、野線に囲まれてはいないが、名刺の引用などと同様の手法と言えるだろう。「裁判速報」もビラの引用であり、これはゴチックではなく号数を上げた明朝の大文字で囲み野線の中に表されているが、やはり視覚的な引用となっている。初版における挿絵と本文との有機的関係については拙稿「月曜書房版『壁』について」（注3）で考察したとおりだが、こうしたタイポグラフィはそうした視覚的表現を補助する役割を果たしている。「動物園」の方向を示す立札や、マネキン人形の看板、「世界の果」の映画の画面などは、桂川寛による挿絵で表現されており、挿絵と本文中のタイポグラフィとの親和性を高めている。

#### 四 「パベルの塔の狸」の揺れの問題

5（6との相違点）<sup>473</sup> 上18・下14とらぬ狸↓【明朝】<sup>484</sup> 下13・<sup>487</sup> 下10とらぬ狸↓【ゴチック】<sup>489</sup> 下3 ぼくの狸が【狸のみゴチック】↓ぼくの

が・上16狸↓【明朝】490下5狸↓【ゴチック】  
 6 463下4・465下21・466上7・469上1・上21・470下2・下19・471下1・下17  
 ・472上11・上16・下7・473上1・上11・上16・上18・下14・下21・474下8・  
 475上5・下1・476下2・477下4・下15・478上4・482上5・483上2・上16・488  
 下16・491下10・下13とらぬ狸【ゴチック】483下3・下4・下9・485上12・  
 486上5・上16・下3・下14・下19・487上7・上12・上20・下16・488上19・下  
 18・下20・下22・489上6・上10・上16・下3・下5・下7・下8・491下15・  
 下19狸【ゴチック】

「バベルの塔の狸」におけるゴチックは、「とらぬ狸」と「狸」  
 にのみ使われている。

これは基本的には「赤い藁」の「彼」と同じく、バベルの塔に数多  
 くいる「とらぬ狸」たちの中で、「ぼく」の影をくわえていった一  
 匹だけを指す固有名を表すのに用いられているようである。しかし、  
 そこには初出・初版ともに微妙な不整合がある。

雑誌「人間」版の初出(5)と初版(6)との最初の違いは473ペ  
 ージの二箇所だが、上18は「人間は誰でも各々のとらぬ狸を持つて  
 いる」、下14は「とらぬ狸たちは笑い(あるいは鳴き?)やみ」と  
 という箇所、いずれも明朝になっている。これらは「ぼく」の影を  
 奪った一匹を指す固有名ではない部分であり、ゴチックの用法が固  
 有名を表すためだとすれば、ゴチックを使わない初出が正しいと言  
 えよう。一方、484下13は、「とらぬ狸の独立運動だ。」という大勢の  
 とらぬ狸たちを表す箇所なので、明朝を用いた初版が正しく、ゴチ

ックの初出は誤りである。487下10は「出て来た時に、とらぬ狸は小  
 さなガラスの箱を小脇にかかえていました。」と固有名を表す箇所  
 であり、ここではゴチックの初出が正しい。489上16「別に、」  
 と狸はかすれ声で言いました。」と490下5「狸たちは下に迫ってお  
 りました。」は初出と初版があべこべの關係になっているが、前者  
 は固有名なのでゴチック、後者は大勢なので明朝をとるべきだとす  
 れば、いずれも初版が正しいということになる。

また、両者に共通する不整合もある。473上11と下14の「とらぬ  
 狸」は、バベルの塔のまわりの一万匹を表しているのに、明朝が正  
 しいはずだが、どちらもゴチックである。478上16と下4・下21、480  
 上10の「狸」は、いずれも固有名なのでゴチックが正しいはずだが、  
 明朝になっている。

こうした揺れについて、一つの立場は、矛盾のない理想のテクス  
 トを想定してつくることであろう。しかし、安部の原稿や格拉刷り  
 が参照できない状態では、これらの矛盾が安部によるものだったの  
 か、植字工や編集者によるものだったのか、確定できない。つくら  
 れた「理想のテキスト」は、校訂者の読みによって再編成されたも  
 のとなり、安部のテキストとは別物とならざるを得ないであろう。  
 こうした揺れについて、何が正しく何が誤りであるかは、それ自体  
 読みを含んだ判断となる。ここでは「とらぬ狸」と「狸」のゴチッ  
 クが固有名を表しているという仮説に基づいた読みを示してみたが、  
 違う基準で読めば、また正しさの判断は違ってくるであろう。重要

なのは、まず個々の印刷物の性格と、それぞれの違いを明らかにすることであると考える。

## 五 タイポグラフィの変遷

見てきたように、安部公房におけるゴチックや太字・大文字は、引用や重要な言葉の強調という一般的な用法だけでなく、一般名詞を固有名として用いる時の記号として使われている可能性が高い。

最初に挙げた「事業」と「赤い蘭」の太字やゴチックの箇所が初版本で消えたことは既に述べたが、他のゴチックの箇所についても後の刊本では明朝に置き換えられることが少なくない。「S・カルマ氏の犯罪」の「近代文学」での初出でも、初版でゴチックとなる箇所が明朝で組まれる傾向が顕著だが、こうした箇所からは、文芸誌や文学出版における明朝体の偏重、「文学」端正な明朝体組版」という制度について考えさせられるところがある。

安部自身 そうした制度の中での執筆をはじめたためか、主として文芸誌に発表された『壁』以降のテキストにおいては、ゴチックはほとんど見られなくなっていく。絵画と文学のコラボレーションのような形で構想された『世紀群』（注4）や『壁』のタイポグラフィックな紙面の試みは、ほぼこの時期までで終ることになる。

最後に、『壁』のタイポグラフィの変遷の例として「S・カルマ氏の犯罪」冒頭の「目」について見ておきたい。以下に掲げるのは

冒頭の「目」の三通りの表記について、前掲拙稿(注5)のリスト番号で整理したものである。

明朝	4	6	9
・	・	・	・
12	28	10	
・	・	・	
14	38	11	
・	・	・	
18	39	13	
・	・	・	
22	44	16	
・		・	
29		23	

し、後者は他の刊本にも受け継がれることになる。全般的には、やはり文学全集系で明朝体が好まれる傾向を示しているように思える。これらの違いについて、いずれにしてもテキストに変わりはないとする立場もあるだろうが、文字組や活字の種類（フォント）も含めて考えた時、一つとして同じテキストはない。近代の文学はまず何よりも紙に刷られた文字から成っている。電子テキスト化が進む現在において読む我々は、その紙面の有り様に目を凝らすことが必要なのではないだろうか。

—注—

(1) 「文芸と批評」二〇〇一年一月・二〇〇二年五月。

(2) 「人間」一九四九年一月。

(3) 「言語文化研究 徳島大学総合科学部」第十巻、二〇〇三年二月。

(4) 注(3)参照。なお、『世紀群』の図版の一部は、『草月とその時代』  
94p.1270「展カタログ」(草月とその時代展実行委員会 一九九八年  
一〇月一七日)や花田清輝『サ・清輝』(第三書館 一九八六年  
六月一日)などで見ることができる。

(5) 注(1)に同じ。